

旧稿復刻に際して

これは 40 年以上も昔に私が上智大学外国語学部紀要に書いた論文の復刻である。当然、そんなものを今さら復刻する意味があるのか、という疑問がわくだろう。筆者自身は多少照れくささを感じはするものの、まんざら無駄でもあるまいと思うので、その理由を少々述べたい。

本論が扱う問題領域のうち、**мат**「卑猥な悪罵語」を取り巻く状況が当時と一変してしまったのは事実である。この表現形態は、ロシア人なら誰でもが知っていながら、帝政時代、ソ連時代を通じて多少なりとも公の場面では禁句であった。現在では存在を認知され、ある程度許容されるものとなった（私たちが会話にこれをはさむことは避けたほうがよいが）。口頭発言をそのまま伝える必要がある場合には印刷もされるようになった。こうした状況を反映して、これらの語彙・表現を解説した辞書が少なからず出版されている。ロシア人との交際もペレストロイカ以後量・質（種類）とも桁違いに拡大したので、ロシア語を学ぶ者なら、ある程度はこれに接し、通じているはずである。

この点の変化はアメリカのほうが著しい。かつてアメリカはこの面できびしい国であったが、60 年代後半以降たがが外れたようになり、今や日常会話でも多用されるようになった。当然印刷物（または映像）にも頻繁に顔を出し、その結果日本でもこの類の表現に対する理解が進んだ。こうして多くの日本人が **four letter words** というものの意味と用法を知ることとなり、ある程度納得できるようになった。

そんな時代になってもこのような論文がまだ必要なのだろうか。必要性がなくならないのは、この論文が当初から、個々の **мат** の辞書的解説と網羅を目指すものではなく、**мат** をふくむ **ругательство**「罵倒表現」という表現形態の本質と構造の分析を目指すものだからである。表現の規範が緩み、ロシア人との交際の幅が拡大した今日、この表現形態全般に関する理解の必要性はむしろ上がっているので、**мат** の辞書的な解説が出回った現在でも、この論文がもつ意味は変わっていない、と考える。

この論文を執筆していたとき、助言を求めたロシア人のほとんどに「**ругательство** が論文のテーマになるのか」とあきれられた。今ならどうという反応になるのだろうか。意図が理解される度合いは上がっているだろ

うが、同様な反応は消えていないと思われる。逆説的だが、これも復刻に意味があることを示すだろう。

まず、私たちが理解しなければならないのは **мат** だけではなく、**ругательство** 全般だということを言いたい。**мат** は好奇心を刺激するものなのでとかく注目されるが、ロシア語を学ぶ外国人にとってはやはり特殊な事項にすぎない。一方 **ругательство** というのは、**мат** をふくむはるかに広い表現形態であり、これを知らないとロシア人の発話意図を正確に理解できなくなることがある。

次に、日本語にはそもそも **ругательство** という概念、または表現形態が存在しないので、この表現が用いられる状況も、表現の真意も、その表現が個々の場合でどの程度強いものであるかもつかめず、さらにはそれが **ругательство** なのかどうかさえわからない場合も少なくない。しばしば文字通りの意味に受け取ってしまい、本当の意味も発言のトーンもわからずに終わってしまうのである。

さらに、**ругательство** 自体をひとわたり理解したとしても、これはしばしば直接に表現されず、言い換えられたり、省略されたりするので、日本人はついていけなくなることがある。もとの表現とならんで言いかえと省略の方法を知らなければならないわけだが、それには一定の法則性があるので、それを心得ることが必要なのである。

以上はじつは本論の中でくどいほど繰り返されていることなのだが、復刻に際し、その必要性を言うためにあえて強調した。今回は技術的理由もあって、発表当時の形態に一切手を加えていないので、今となっては不要かもしれない部分も含まれているが、この問題の構造全体を示すという執筆意図（目的）を了解していただければ幸いである。

今回の復刻に当たってはロシア語通訳協会の益不二夫会長以下のご理解とご協力があった。特に黒岩幸子副会長は、本論が「今でも役に立つ」からと、復刻を発議されて、今回の運びとなった。記してあつく感謝申し上げる次第である。

読者諸氏のロシア語理解力向上にいささかでも役だつことを願いつつ。

2013年11月1日

宇多文雄